

# 「本願を立ッ」考

望 月 海 漱

1

『開目鈔』は三大誓願の表明に先立って、

詮するところは天もすて給、諸難にもあえ、身命を期とせん。……善に付け悪につけ法華経をすつる、地獄の業なるべし。本願を立ッ。<sup>(1)</sup>

とのべている。このお言葉は日蓮聖人の法華経信仰へのあり方を明示したものであるが、善悪につけ法華経信仰をすることが墮地獄の業であるとする時、「本願を立ッ」というお言葉を理解するためには、日蓮聖人が法華経とどうかかわりあっていたのか、ということを明白にしておく必要があると思われる。

たとえば、この「本願を立ッ」のお言葉についてふれた二、三の書物を見ると、そこには法華経方便品の「我本立誓願」の言葉を主として引用して説明しているのを知りうる。<sup>(2)</sup>この語句が引用せられるのは本誓願を本(誓)願と読もうとするためであろうと思われるが、しかしこれは、釈尊が一仏乗を説示したことにより、これを説こうとした本誓願が満足せられ、一切衆生を仏道に入らしめたことを表明したものであるから、日蓮聖人の本願を立ッとし法華経弘通の覚悟を表明したのとは質を異にするように思われる。

その手がかりをどこに求めようとするのが、本試論の目的といえよう。

「本願を立ッ」考(望月)

山川智応博士は『開目鈔講話』の中で、「本願を立ッ」について、「大願を立てよう」と文釈し、更に、「立宗開教のはじめの叫びであった清澄山最初説法の前、おそらくは建長五年の春、叡山から下りたまうた時に、決定せられた御誓願であらうとおもはれる」とした上で、「此の本願がましましたればこそ、三十年の大迫難の中を一步も退きたまはず」<sup>(5)</sup>「すまれたのだと義釈している。このように「大願を立てよう」との文釈の理解は他の諸師にも見られる。<sup>(4)</sup>

これは至任一妙教授も同様で『開目鈔に聞く』の中で、「そこで私は、二十年前、願を立てたのです」「不滅の大願であります」<sup>(5)</sup>として、大願とした上で、山川博士のように、この大願が建長五年に立てられたことをも示している。

この「本願を立ッ」を大願と見るのは、『録内啓蒙』にも見られる。すなわち、「大願を立ン等」とした上で、「次の御文体即大願ノ体ナリ、板本ニ立シニトアリ、ニノ仮名非ナリ、又一本ニ立ヨト点シテ、下知ノ言ニ用タル、亦非ナリ、御自身ノ願ヲ拳玉ヒ、下ノ用ヒジトナリト云句ニテ、先死身ノ願ヲ結シ玉ヒ、我レ日本国ノ柱トナラント云ヘル下ニテ、弘法ノ願ヲ述玉ヘリ、大願ノ大ノ字、本ノ字ニ作レルヲ語式ニ正トセリ、サレトモ大ノ字還テ穩ナル歟」<sup>(6)</sup>として、大願であり、死身ノ願トシ、日蓮聖人の弘法の大願を示したものだとなっている。

清水竜山教授は、見宝塔品の六難九易中「の此為難事宜発大願」とある文に応じて「大願を立てん乃至種々の大難出來すとも乃至其外の大難風の前の座なるべし乃至誓ひし願破るべからず」となったのであり、更に『阿仏房御書』『上野殿御返事』等の御書を挙げて、本願ではなく大願であり、「御真跡に方に一つ「本願」とあったとしても、恐らくは御筆誤でもあって、須く「大願」であるべきである」と、「本願を立ッ」は「大願を立ッ」と読まなければなら

ないことを明示している。そして更に、『破良観等御書』に「本よりの願」云々の句が見え、これが「本願」に似ているように思われるが、これは日蓮聖人が「清澄入山して虚空藏菩薩の宝前に立願せられた時の述懐で、「本よりの願」とは、「其時已來の願」のことであり、「経祖典には絶えて「本願」といふ名詞はない」として、「本願」となしているのは真意に心付かなかつたからであらうとなしている。

このように「本ト願を立ツ」なのか「大願を立て」なのかは議論のあるところであるが、御真跡のない今は、小川泰堂居士の行跡は一つの手がかりになる。

すなわち「大願を立てよう」と文釈された山川智応博士も、「御真跡は、もと本願とありしが如し。泰堂居士の『御遺文録』稿本みな本願となり居れり。居士は、不審の字は、御真跡に对照したりとあればなり。但し正本対校せりといふ乾師の本に基づける稲田師の『全集』には、『大願』とあり。今は大願に従ふも、泰堂居士の『本願』の方、真なりしにあらざやと考ふるなり」とのべている。博士が「此の本願がましましたれば」というのはそのためであろう。

これをうけて田中芳谷師は、この間の事情について、この言葉は、古来、多くの刊本において「大願を立てん」となされていたことが知られている。しかし、小川泰堂居士が明治五年、身延山の宝蔵に入り、御真跡と对照せられ、「大願」は「本願」と記るされていたので、「本」と朱正されていた。その稿訂本が出版せられたのは、居士の没後で縁故の離れた方面で手がけられたため、この朱正はとり入れられず、従前通り「大」となされたのであり、それが昭和定本編纂にあたり、本来の真筆の型にあらためられ「本ト願を立ツ」という文にもどされた、<sup>(9)</sup>といういきさつを示している。

すなわち「本」であったのか「大」であったのか意見のわかれるところであるが、これの如何は小川泰堂居士の朱

正の件にかかわることであり、他方、清水電山教授のように、「本」であったとしても誤筆だとする意見もあることを知りうる。

ところが、茂田井教亨教授は『開目抄講讀』の中で、「本願を立ッ」について、昔は「本願を立ッ」を「大願を立てん」とありましたが、「大願を立てん」とこれから立てるのではないのです。もと願をたてたのですから、三十二才の時にお立てになった願だと思えます、と、山川博士、室住教授と同じ意見をのべながらも、「普通の解釈ですと日蓮聖人の自覚的主体者としての立場から発願、立願されているのだ、とこう見るのでありますけれども、これは宗祖自ら柱とか、眼目とか、大船という事をおっしゃるには、その中に法華経がなければならぬ」とし、「『本尊鈔』式に言うならば、釈尊の因行果徳の二法が譲与されている日蓮という私が」ということで、「我の中には法華経の自己実現がある。すなわちこの法華経が末法という時を選んでいるのです。法華経が末法とかかわりをもつのです」としながら、「その世界で発願され立願され」たもので、この我は「法華経の行者日蓮で」、「単なる安州の日蓮という個我ではなくて、日蓮法師と言われる歴史的な存在となっている。これは歴史的世界になります。歴史的世界におけるわたくし」として、とらえて、それ故にこそ「本願を立ッ」と書かれたのだとしている。<sup>10)</sup>

すなわち、この茂田井教授のご理解は、写実的には日蓮聖人のご生涯の事実としてとらえながらも、法華経と日蓮聖人の間に、いわゆる射影と照射との関係が見られ、それ故にこそ、時間を超えた宗教的な「本願」としてとらえる昇華が見られることを知りうる。そして、このような茂田井教授のとらえ方は、実に重要な要素を含んでいるように思われる。

誓願（本願）というのは *prañihāna* を訳したものであることは知られている。これは *pra* 前に、先に、曾ての意をもつ前置詞に *nidhāna* 保存、貯蔵、宝、願などの意をもつ名詞がつけ加えられたもので、冥想、誓願などの意をもち、誓願、本願などと漢訳されている。そこでこの語は次のように使われている。

so 'pi Śariputra Padmaprabhas-tathāgato 'rhan-samyak-sambuddhas triṇy eva yānāny ārabhya dharmam desāyisyati | kim cāpi Śariputra sa tathāgato na kalpa-kaśāya utpatsyate | api tu prañihāna-vaśena dharmam desāyisyati ||<sup>(11)</sup>

（舍利弗よ、かの尊い等正覚の華光如来は、三乗に関して法を説くであろう。舍利弗よ、かの如来は劫濁には出現しないであろう。しかし、本願の力によって法を説くであろう。）

すなわち、舍利弗が将来なるであろう華光如来も、釈尊と同じように一仏乗を三乗に分別した法を説くが、劫濁の時には出現しないが、華光如来が持つ本願力によって法を説くであろうとしており、本願 *prañihāna* の力が説示に強いかかわっていることを示している。妙法華経はこのところを、

華光如来亦以三乗教化衆生。舍利弗。彼仏出時雖非惡世。以本願故説三乘法。<sup>(12)</sup>

とし、正法華経は、

蓮華光正覚亦当承統説三乘法。而仏説法具足一劫。所可演經示奇特願。<sup>(13)</sup>

としている。かの仏が劫濁には出現しないという梵文法華経の表現が、妙法華経では惡世に非すと雖も出現すとなさ

「本願を立ッ」考（望月）

れ、正法華経では説法具足すること一劫となされ相異をしているけれども、prañdhanaを本願と訳し、奇特願と訳していることは明白である。<sup>(14)</sup> 奇特の願というのは、普通ではない願ということを示すが、本願 prañdhana が単なる願ではなく、仏の深い心から生ずるものであるためであろう。

そして更に舍利弗への授記に先立って、この本願について、われは昔、曾て二万億の仏の所において汝を教化し、とした上で釈尊は、

汝亦長夜隨「我受」學。我以「方便」引「導」汝故。生「我法」中。舍利弗。我昔教「汝志願」仏道。汝今悉忘。而便自謂「已得」滅度。我今還欲「令」汝憶「念」本願所行道「故」。<sup>(15)</sup>

妙法蓮華教菩薩法仏所護念の法華経を説くのだと語っている。ここでいう本願所行道の本願は、仏の本願ではなく、舍利弗の本願であることは明白だが、梵文法華経は、

mama ca tvam Śariputra dirgharātram anusīksīto 'bhūt | sa tvam Śariputra bodhisattva-saṃmantrīena bodhisattva-rahasyenēha mama pravacana upaṇaṇah | sa tvam Śariputra bodhisattvādhiṣṭhānena tat paurvakaṃ caryā-praṇidhānam bodhisattva-saṃmantrīkaṃ bodhisattva-rahasyaṃ na samanusmarasi | nirvṛto 'smīti manyase | so 'haṃ tvam Śariputra pūrva-caryā-praṇidhāna-jñānānubodham anusmārayi-tu-kāma……<sup>(16)</sup>

（舍利弗よ、汝は長夜に私に学んだ。舍利弗よ、汝はかの菩薩の計画、菩薩の神秘によって、この世で私の教えの中に生まれた。舍利弗よ、汝はかの菩薩の立場によって、前世の所行と本願を、菩薩の計画と菩薩の神秘を思いおこさないで、私は滅度したと考えている。舍利弗よ、汝に私は前世の所行と本願と智慧の回想を思いおこさせよう

と欲して……)

となして法華経を説いたとしている。舍利弗が昔、仏にしたがって仏道を志願したというのは、*purvakam carya-praṇidhanam* を訳したもので、志願とは *praṇidhana* のことで、舍利弗が前世におこしたものであり、本願所行の道を憶念せしめんと欲してというのも、*purva-carya-praṇidhana-jñānubodham* を訳したもので、本願とは *praṇidhana* のことで、舍利弗が前世におこしたものであることがわかる。すなわち妙法華経により志願と訳し本願と訳されているものは、ともに同一の言葉であり、それは前世において長夜に仏の御許で学びそこで立てた願であり、法華経はそのことを忘却している、思いおこさせるために説かれるのであるということ、更には、この本願は菩薩の立場によってなされたものであることを示すから、舍利弗がそれを想起しなかったのは、前世での所行と本願とを忘却し、自ら声聞としての立場に立っていたことに起因していることには、注意を払わなければならない。<sup>(17)</sup>

したがって、本願というのは、前世において仏に教導をうけるといふかかわりを持つこと、その前世で仏に対して立てたものであること、それ故にこそ、今世において自己と仏とのかかわり合った本願を思いおこすことが肝要なことと思われる。

4

本願(誓願) *praṇidhana* のこのような基本的な使われかたをふまえたところで、法華経の中において使われている本願(誓願)の種々相を次に見ていくことにする。

方便品において一仏乗を説示した仏は、諸仏如来は但、菩薩のみを教化したまうことを不聞不知の者は仏弟子に非

「本願を立ツ」考(望月)

「本願を立ッ」考(望月)

ずとした上で、比丘比丘尼で、

自謂「已得阿羅漢」是最後身究竟涅槃。便不復志求阿耨多羅三藐三菩提<sup>(18)</sup>

このような人は増上慢 *abhimānika* の人であるとしているが、この志求について梵文法華経は、*bhikṣur vā bhikṣuṇī vā 'rhatṭvam pratijānyād anuttarāyaṃ samyak-sambodhau praṇidhānam aparigṛhyōchchīno 'smi buddha-yaṇād iti...*<sup>(19)</sup>

(比丘比丘尼が阿羅漢に達したとして、無上等正覚を得たいとの本願をもたないで、私は仏乗には縁がないと…)として、志求が本願(誓願) *praṇidhāna* であることを示している。ここでは仏の願いは但教化菩薩であるから、仏乗を求めようとならない者、そのような本願に生きようとならない者は増上慢だということになることを示している。そして偈の中において、

我本立誓願<sup>(20)</sup> 欲令一切衆 如我等無異 如我昔所願 今者已満足<sup>(20)</sup>  
が語られ、一切衆生を仏道に入らしめたとしているが、梵文法華経は、

*yathā ca paśyāmi yathā ca cintaye yathā ca saṅkalpa mam 'asi pūrvam | pariṇipūtram etat praṇidhāna mahyaṃ buddhā ca bodhiṃ ca prakāśayāmi*<sup>(21)</sup>

(曾て私が見、考え、決意したように、私の本願は完全に満たされた。仏として悟りを私は説く)

として、所願が本願 *praṇidhāna* の訳であり、我本立誓願は意識であることを示している。そしてここでの本願は、仏が昔から抱いている願であることは明白である。

方便品においてはもう一箇所、



諸仏本誓願 我所行仏道 普欲<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>衆生 亦同得<sub>ニ</sub>此道<sub>一</sub> <sup>(22)</sup>

の語が見られる。梵文法華経は、

eko 'pi satvvo na kada-ci tesān śrūtāvāna dharman na bhaveya buddhah | prañidhānam etad dhi tat-  
hāgātānāṃ caritva bodhāya carāpāyeyam || <sup>(23)</sup>

(法を聞いて仏とならないものは一人もない。悟りのために信じ、人をしても行じさせる。これが如来たちの本願である)

として、諸仏の本願は一切の衆生を仏とさせることであることを示して、妙梵同様である。したがって、ここでは仏の本願の何たるかを示しているといえよう。

そして譬喩品では、前掲の引用文に引き続いて、舍利弗に記前を与え、仏は悪世 kalpa-kāśya には出現しないとしながら、

以<sub>ニ</sub>本願<sub>一</sub>故説<sub>ニ</sub>三乘法<sub>一</sub> <sup>(24)</sup>

としており、梵文法華経も、

api tu prañidhāna-vaśena dharman deśayisyati <sup>(25)</sup>

(しかし、本願の力によって法を説くであらう。)

として、三乗には言及しないが、仏は本願力による説示を展開することを示している。すなわち、仏の説法も本願によってなされることを意味する。

五百弟子受記品の中には、富樓那が諸大弟子に仏が記前をしたことをたたえ、考えたことをのべ、仏がそれをうけ

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立ツ」考(望月)

て富楼那について語り、千二百の阿羅漢の所念を知った仏は迦葉にむかい彼等にも記前を与えることをつけ、更に五百の阿羅漢にも記前を与えたことが示されている。この五百の阿羅漢は喜び衣裏繫珠の喩を語り、仏は菩薩たりし時にわれ等を教化せられたが、私達は知らず覺らず、阿羅漢という小さな悟りで満足し、貧乏な暮らしをしていた。しかし、

一切智願猶在不<sub>(8)</sub>失

と語っている。梵文法華経は、

sarvajña-jñāna-prañidhānena sadā viraṣṭena te vayan bhagavans tathāgatena sambodhyamānān<sub>(8)</sub>

(一切智者の知への本願が常に失なわれなかったので、世尊よ如来によって我々は悟られました。)

としているから、妙法華経が説く願は本願のことであり、以前(前世)から本願があったのにそれに気づかないでいた。今初めて気づいたのだが、それが失なわれずに来たために記前を得ることが出来たことを示している。

授学無学人記品では、阿難に記前を与えた仏が、釈尊と阿難とはともに空王如来 Dharmagaganābhyaudgatārājaのもとで無上等正覚への心を発し、釈尊は勇氣を出して精進したが、阿難は絶えず教えの多聞をねがった。このちがいで釈尊は非常に早く仏となり得たが、阿難は再びその釈尊のもとで教えを護持し法蔵を護るものとなった。そして、記前を与えたことを示しているが、妙法華経はそのところを、

阿難護<sub>(8)</sub>持我法」。亦護<sub>(8)</sub>将来諸仏法蔵」。教<sub>(8)</sub>化成<sub>(8)</sub>就諸菩薩衆」。其本願如<sub>(8)</sub>是

とのべている。梵文法華経は、

punar ānanda-bhadro buddhānām bhagavatām saddharma-kośa-dhara eva bhavati sma | yad uta bod-

hisattvānām parinispattī-hetoh prañdhānam etat kula-putrā asya kula-putrasyēti | <sup>(87)</sup>

(又、阿難尊者は諸仏・世尊たちの妙法の蔵の護持者であった。又、善男子よ、菩薩たちを完成させるため、これがこの善男子の本願であった。)

とのべて、阿難が空王如来のもとでたてた本願、それは妙法を護持し、後の菩薩たちを導くためのものであったことを示している。この本願の故にこそ阿難は記前をうけ得たと見ることが出来る。ただ、阿難自身は空王如来のもとで自分がたてた本願を忘失していたらしい。それ故、妙法華経は、記前をうけた阿難が喜び未曾有なることを得たとし

て、  
亦識本願 <sup>(88)</sup>

としているが、梵文法華経は、阿難が記前を得、仏国土の名号を聞いて、

pūrva-prañdhāna-caryām ca śrutvā tujā udagra āta-manaskah pramuditah pūti-saumanasya-jāto

'bhūt | tasmīnś ca samaye bahūnān buddha-koi-nayuta-śata-sahasrānān saddharmam anusmarati  
sni' ātmanas ca pūrva-prañdhānam | <sup>(89)</sup>

(前世の本願と修行とを聞いて、満足し、勇躍し、大歓喜し、喜び、深く悦意を生じた。そして、その時に、彼は無量百千万億那由佗の仏たちの妙法と自身の前世の本願とを思いおこした。)

前世で自らがたてた本願を思いおこしたことを、詳しくのべていることを知りうる。すなわち、識本願というのは、ただ識ることではなくて、前世での自らのあり方を明白に思いおこすことを意味しており、それあるが故に記前が与えられているということを明白に確認しておくことが大切であるといえよう。

「本願を立ッ」考(望月)

法師品からはじまる第二期成立の法華経は、第一期成立の法華経をうけて弘経の道が説かれるのであるが、法師品は、本願に対するこのようなあり方をうけて、更にそれをすすめて、次のように説示している。

薬王菩薩に因せて八万の菩薩たちに、妙法華経の一偈一句を聞いて一念随喜する者には記前を与えとし、更に、如来の滅後に法華経の一偈一句を聞いて一念随喜する者には無上正覚の記前を与えとし、法華経の一偈を受持・読・誦・解説・書写し、この経巻を敬い視ること仏の如くにし、種々な供養の事をなす者は、

已曾供養十萬億仏。於諸仏所成三就大願。愍衆生故生三此人間。<sup>(82)</sup>

のである。と。これに対し梵文法華経は、如来の滅後 *parinirvāta* に法を聞いて一偈を聞いただけでも、随喜するだけでも無上正覚に達するであろうとした上で、

*paripūrṇa-buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-pariyupāsītāvinas te Bhāṣaiyarāja kulaputrā vā kuladhuhit-aro vā bhaviṣyanti | buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-kṛta-praṇidhānās te Bhāṣaiyarāja kulaputrā vā kuladhuhitaro vā bhaviṣyanti | sattvānām anukampā r̥tham asmiñ Jambudvīpe manusyeṣu pratyājātā vedīavāh |*<sup>(83)</sup>

(薬王よ、かの善男子善女人等は、百千万億那由佉にみちる仏たちに仕えるものとなるであろう。薬王よ、かの善男子善女人等は、百千万億那由佉の仏のもとで本願をたてたものとなるであろう。(彼等は)衆生たちへの惑みのためにこの閻浮提において人間達の間に再生したと、知るべきである。)

としている。すなわち、妙法華経と梵文法華経の表現とに大差はなく、ともに法華経を聞いて一念随喜する者は、無量の仏に仕え、その仏たちのもとで本願をたてたもので、衆生を惑むために人間として再生したものであることを示

している。そして妙法華経が大願としたのは本願 *prañihāna* であることは当然のことであり、本願であるが故に前世で諸仏に仕え、そこでたてたものであることを示している。又、本願なるが故に衆生を愍み再生したといわれることは、本願の本旨を示すものである。それ故に法師品はこの説示を引きついで更に、法華経を受持・読・誦・解説・書写する者は、大菩薩であり、無上等正覚を成就したけれども、

哀<sup>34</sup>三願生三願生三此間一。

として、生<sup>34</sup>此間一のは願<sup>34</sup>つての上であることを示している。梵文法華経もこの願が、前生における本願力によるものだとし、

*lokasya hitānukampakaḥ prañihāna-vaśeṇopapanno 'smiṇ Jambudvīpe manuṣyeṣv asya dharmapar-yāyasya samprakāśanātāyā |* <sup>(48)</sup>

(世間を愍むために本願の力によって、この閻浮提の人間たちの中に、法門を説示するために出現をした。)

として、願<sup>34</sup>つてというのには、本願の力 *prañihāna-vaśa* によるものであり、世間を愍み、衆生に法門を説くために生まれ出たものであることを再説している。そしてそれは、大菩薩である *tathāgata-dāsiṇ* (如来と見なす) といわれるが、梵文法華経は、如来の使 *tathāgata-dūta* (如来の使者) について、人間世界に再生したこれらの人々は、仏国土へ誕生するのをかえりみずになされた人々であることを明示しているから、この世に再生した人々——仏滅後に法華経を受持・読・誦・解説・書写する人々——に対して、法華経が払っている重要性には着目しておかなければならない。

それ故に、法師品は更に如来の現在にすら猶、怨嫉多し、況んや滅度の後をや、という法華経を仏滅後に人々に説

「本願を立つ」考(望月)

「本願を立つ」考（望月）

き聞かせようとする人々は、諸仏に護念せられることを得るとし、その理由は、

是人有二大信力及志願力諸善根力<sup>(36)</sup>

によるのだとしている。梵文法華経も同じ表現をしているが、右の文に対して、

*pratyātṃkām ca teṣaṃ śraddhā-balaṃ bhaviṣyati kuśala-mūla-balaṃ ca prañidhāna-balaṃ ca*<sup>(37)</sup>

（彼等にはそれぞれに信力、善根力、本願力とがある。）

として、順序を異にするだけで、同じ内容を示しており、それは、

在所三存立二已身還聞。諸信力也。善本力。志願力。<sup>(38)</sup>

とする正法華経の表現と同一である。そしてこの法華経三本はともに、信力、善根力、本願力を有する人は、如来と

共に宿るなり。<sup>(39)</sup>としているから、仏滅後に法華経を説くという人は、前世において仏のもとでおこした本願力を思い

おこし、仏の言葉をそのままに信<sup>(40)</sup> *śraddhā* じ、説示を展開していくことが強調されていることを知ることが出来る。

しかして見宝塔品を見ると、空中 *antarikṣa* に住在した多宝如来について、妙法華経は、

其仏行<sup>(41)</sup>菩薩道<sup>(42)</sup>時。作<sup>(43)</sup>大誓願<sup>(44)</sup>。

となしており、梵文法華経は、

*tasycā tad bhagavataḥ pūrva-prañidhānam abhūtī*<sup>(45)</sup>

（かの世尊は前世にこの本願があつた。）

としている。本願は前世において仏のもとでたてたものであることは、既説したところであるが、多宝如来が菩薩の道を行じた時にたてた大誓願という妙法華経の言葉は、それを裏づけるものであり、梵文法華経も、前世の本願

pūrva-praṇidhāna としたすゞ後で、 aham khalu pūrve bodhisattva-caryām caramāṇo (美と私は前世において法薩の修行を行っていた。) としているから、多宝如来の行菩薩道というのは、やはり前世における行であることを明白に示している。

本願の本質がここにある故に、仏は多宝如来が法華経の会座に出現したのは、  
是多宝仏有「深重願」。(43)

として、深重の願のために出現したことを示している。この深重の願は、梵文法華経によると、

bhagavataḥ Prabhūtaratnasya tathāgatasyāhataḥ samyak-saṃbuddhasya praṇidhānam gurukam abh-  
ūt | etad asya praṇidhānam | (44)

(等正覚の尊い世尊、多宝如来には重要な本願があった。その本願はこういうことである。)

であり、法華経が説かれることがあれば、法華経を聞くために出現するのだ、となされている。すなわち、仏もまた前世の本願によって行動をおこしていることを知りうる。このことは、見宝塔品の偈の中においても、

彼仏本願 我滅度後 在在所<sub>(45)</sub>往 常為<sub>(46)</sub>聴<sub>(46)</sub>法

praṇidhānam etasya vināyakaśya niśevitam pūrva-bhaye yad āsit | parinirvṛto pi imu sarva-lokam  
paryeṣati sarva-dāsa-dḍisāsu | (48)

(前世の世において修めたこの指導者の本願は、彼が完全な涅槃に入った後でも十方のあらゆる世間に求められる(という)ことである)

とのべられているから、多宝如来の本願も前世にたてたもので、その本願の故に法華経の会座に出現したことは明白

「本願を立つ」考(望月)

「本願を立つ」考（望月）

である。

そして勅持品を見ると、摩訶波闍波提、耶輸陀羅比丘尼に記別を与えた仏に対し、八十万億那由他の菩薩たちは如何にすべきであるか、と考えて、仏前で仏滅後に法華経を説きましようとする誓の言葉をのべるが、そのところで、この菩薩たちの心にふれて、

欲<sub>三</sub>自<sub>三</sub>滿<sub>三</sub>本願<sub>一</sub>。便於<sub>三</sub>仏前<sub>三</sub>作<sub>三</sub>師子吼<sub>一</sub>。而<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>誓言<sub>（47）</sub>。

と表現している。これに対する梵文法華経の表現は、

ātmanas ca pūrva-caryā-prañihānena bhagavato "bhimukham simha-nādan nadante sma<sub>（48）</sub>

（自身の前世での修行と本願とによって、世尊にむかって獅子吼をなした。）

とある。妙法華経が欲<sub>三</sub>自<sub>三</sub>願<sub>一</sub>となした中の自本願は、菩薩たち自らが前世においてたてたものであること、そしてそれが修行につながっていることを明白に示している。

5

以上のことについて整理をしてみると、次のようになる。

品名		妙法華経訳	正法華経訳	本願主
方便品	志求	志求	比丘比丘尼	
	誓願	誓願	比丘	仏
	本誓願	本所願	仏	仏



勸 持 品	見 宝 塔 品			法 師 品		授 学 無 学 人 記 品		五 百 弟 子 授 記 品		譬 喻 品				
	本 願	本 願	深 重 願	大 誓 願	志 願 力	願	大 願	本 願	本 願	願	本 願	本 願	本 願	志 願
		本 亦 自 誓	發 願	志 願 力	所 願	立 願	本 行 願	雅 願	志 願	奇 特 願	奇 特 願	本 行	本 行	本 願
善 薩	多 宝 如 來	多 宝 如 來	多 宝 如 來	解 說 者 <small>(菩薩)</small>	善 薩	一 念 隨 喜 者 <small>(菩薩)</small>	阿 難	阿 難	五 百 羅 漢	華 光 如 來	華 光 如 來	舍 利 弗	舍 利 弗	舍 利 弗

「本ト願を立ツ」考(望月)

妙法華經・正法華經が、誓願・本願・大願・志願・志求等と訳出しているのは、すべて prañidhāna に対する訳語

「本願を立ッ」考（望月）

であり、この *prañihana* を立てたものは、仏から菩薩、比丘等の声聞・阿羅漢にまで及んでいることがわかる。すなわち、本願 *prañihana* を立てるといふことは、それがどのような立場、身分の人であろうとも、それは仏とのかわりの中において立てられるべきものであることを示しているであろう。

しかしして、妙法華經によると、前述の箇所以外においても、本願、大願等の訳出になるところを見ることが出来る。たとえば、五百弟子受記品の冒頭では、富樓那が仏の説示、声聞への授記、宿世の因縁の事を聞いて、仏を見つめて、世尊は甚だ奇特なりとして考えたことが述べられているが、その思念の中に、

唯仏世尊。能知我等深心本願<sup>(49)</sup>。

という一語が示されている。これに対する梵文法華經は、

*tathagata evāsmakam janita āsayaṃ pūrva-yoga-caryāṃ ca* <sup>(50)</sup>

（如来こそ我々の意向と前世の瞑想による行を知っておられた。）

であつて、本願 *prañihana* の語は使用されておらないが、意向 *āsaya* の語を使い、それらが前世 *pūrva* にかかわっていることを示している。このことは如来は意向という我々の心のあり方が、前世とのかかわりの中においてあることを明白に示しているであろう。

しかしして見宝塔品末の偈は、如上の多宝如来は前世において立てた本願 *prañihana* の故に入滅した後でも法華經が説かれる在々所往に出現する説示をうけて、

其多宝仏 雖久滅度<sup>一</sup> 以大誓願<sup>一</sup> 而師子吼

とし、多宝如来と積尊と諸の化仏とはその意を知るべし、

諸仏子等 誰能護法 當得大願 令得久住<sup>(61)</sup>

と述べている。

これに対する梵文法華經は、

paritryto hi sambuddhaḥ Prabhūtaratano munih | sinha-nādam śruṇe tasya vyavasāyaṃ karoti yaḥ ||  
ahaṃ dvitīyo bahavo ime ca ye kojiyo āgata nāyakanām | vyavasāya śroṣyāmi jinasya putrāt yo utsa-  
hed dharmam imam prakāśitam ||<sup>(62)</sup>

(実に正覚者多宝尊者は完全に入滅したが、この決意をなすものの獅子吼を聞くだろう。第二番目の私も、ここに集まって来た何千万の指導者たちも、この法門を説示しようと努めるだろう勝利者の息子たちから、決意を聞くだろう。)

として、本願 *prañdhana* の語を使用してはいない。しかし、法華經を聞くために入滅後も出現しようというのが多宝如来の本願 *prañdhana* であるから、妙法華經は法華經を説こうと決意 *vyavasāya* したものの決意を、前世において仏の前で立てた決意ととらえ、それ故にこそ多宝如来の本願をうけとめるものとして大誓願、大願の訳としたものと考えられる。すなわち、ここでいう決意 *vyavasāya* (大誓願・大願) は本願 *prañdhana* から生み出されて来るものでなければならない。それ故に、法華經を説くことは難事だとなして、妙法華經は「宜得大願<sup>(63)</sup>」となしている。梵文法華經は、善男子よ、一切の衆生を感んで、指導者たちが困難な立場を耐えていることを考えよ、<sup>(64)</sup> となしており、大願が *prañdhana* であることは示していないが、その心のあり方は前述の事情により本願 *prañdhana* のあり方と妙法華經はとらえたからであらう。それに衆生を感んで出場したのは、法師品によると前世における本願

「本願を立す」考(望月)

「本願を立ッ」考(望月)

prañidhāna によることは明白であるので、<sup>(86)</sup>ここにおける決意、それこそは仏が衆生に対して求めるもので、自己が前世において仏に対して立てた本願 prañidhāna 遂行の生き方を求めたものと理解することが出来るように思われる。

このようなあり方に対し、勸持品の冒頭で五百の阿羅漢が受記を得て仏に語った「我等亦自誓願」の句、及び、安樂行品冒頭の文殊師利が仏に語った「敬三願仏故發三大誓願」<sup>(87)</sup>の句における誓願は、それぞれ「vayam api dhagavān utsahāmaḥ」<sup>(88)</sup> (世尊よ我々は耐えまじょう) 「utsodham dhagavato gauraveṇa」<sup>(89)</sup> (世尊を尊重するために耐えまじょう)とされており、本願 prañidhāna の語が使われておられないし、この耐えるというのが本願にかかわるものとも考えられない。先のもは仏が仏の本質、仏とのつながりについて語ったものであるのに、ここでは阿羅漢、文殊師利の言としてなされたもので、耐え忍ぶという心のあり方が、仏滅後の法華經説示に肝要なあり方とは考えられないからである。

6

法華經は声聞や在世の菩薩たちの弘經の願いに対し、これを許されずに地涌の菩薩を召し出されて、これに仏の滅後においての弘經の仕事を付属せられたとなされているが、地涌の菩薩は「在娑婆世界之下。此界虚空中住」<sup>(90)</sup>「ye 'syān mahā-prthivyaṃ adha ākāśa-dhātau viharanti sma」<sup>(91)</sup> (その時、この大地における虚空界に住していた)とされ、弥勒らの疑に対して、「汝等一心信 我從久遠來 教化是等衆」<sup>(92)</sup>「śrūtvā sarve mama śrad-dadhadvam | evaṃ citraṃ prāpta mayā 'gra-bodhi paripācitās cāti mayāve sarve」<sup>(93)</sup> (聞つて一切の者は私を信ぜよ。このように私によって昔に最高の覚りは得られた。私によって一切の者は成就せられた)となされて

いる。この説示は久遠実成に<sup>つな</sup>げられるものであり、地涌の菩薩らは久遠の昔から地下の虚空 *avasya* に住するもので、その時から仏によって教化されて来ているものであることを示している。すなわち、久遠よりこの方 *ditam*、教化をうけ最高の覺りを与えられ、後の世の教化のために成熟されて来ていたのが地涌の菩薩であるといふことは、前世から仏に縁を持ち、仏と俱に歩んで来たものであることを意味する。そして、その人々が仏の滅後の世のために成熟されたというのは、そのために準備をされていたことを意味するから、これは仏の本願 *pranidhana* をうけつぎ、そこに生きる人々であることを意味しているであろう。虚空 *avasya* の語は一切を包みこむ仏の心の<sup>64</sup> 拈がりであることを意味するから、それは見宝塔品が示す空中（妙法華経は虚空と訳出）*antastika* とは相違していることは明白であり、<sup>64</sup> それだけ<sup>64</sup> 從地涌出品に対する注意は肝要で、一切を救わんとする仏の大慈悲心が、仏と衆生との前世からのかかわりの中で果されていることを明記しておかなければならないであろう。そして、その両者のかかわり、これこそが本願 *pranidhana* の語であると考えられる。したがって、開目鈔における「本願を立ツ」の一句について、法華経との関連の上に立つ慎重な審議を願っておきたい。

(58・9・17)

〔註〕

- (1) 昭和定本『日蓮聖人遺文』六〇一
- (2) 清水庵山『開目鈔辨義』（『日蓮聖人遺文全集辨義』）卷九下・五五五、渡辺宝陽『三大誓願』（『日蓮宗事典』）二一九、上田本昌『日蓮聖人における法華仏教の展開』一三七等
- (3) 山川智応『開目鈔辨話』四六九〜四七〇
- (4) 石川海典『開目鈔』（『日蓮聖人御遺文講義』）卷二・二六五、田中応舟『開目鈔』下・二三三
- (5) 室住一妙『開目鈔に聞く』二七〇
- (6) 『録内啓蒙』卷九（開目鈔）下之下・一〇九五

「本願を立ツ」考（望月）

「本願を立ッ」考（望月）

(7) 清水亀山『開目鈔』（『日蓮聖人遺文全集講義』）卷九下・五五四～五五五

(8) 山川智応・前掲書四六九

(9) 田中芳谷『開目鈔講義』三〇〇～三〇四

(10) 茂田井教亭『開目抄講義』二〇九

(11) Saddharmapūjarika, ed. by H. Kern, B. Nanjio, Bibliotheca Buddhica, x, Petersburg. (本願を立ッ)

65

尚' prañidhāna は誓願と訳すべきかもしれないが、「本願を立ッ」の関係で、こと更に本願と訳出した。

(12) 大正九・一一中

(13) 同 同・七四中

(14) 清水亀山教授は「元来「本願」なる語はもと弥陀經の特色要語で、今經祖典には絶えて「本願」という名詞はない』『開目鈔』（『日蓮聖人遺文全集講義』）五五五、となしておられるが、祖典にはともかく、法華經には明白に「本願」の語があることは忘れてはならない。

(15) 大正九・一一中

(16) saddha, 64～65

(17) 正法華經は「吾身長夜亦開導汝以三菩薩道。爾縁此故與在吾法。如来威神之所建立」。亦本願行「念菩薩教」。未得二滅度。自謂滅度。舍利弗。汝因本行欲得識念無央數仏。」としている。大正九・七四中

(18) 大正九・七下、正法華經も志求と訳している。六九・下

(19) saddha, 43

(20) 大正九・八中、正法華經は「志願」、七〇下

(21) saddha, 46

(22) 大正九・九中、正法華經は「本所願」、七二下

(23) saddha, 53

(24) 大正九・一一中、正法華經は「奇特願」、七四中

(25) saddha, 65

- (26) 大正九・二九上、正法華経は「志願」、九七中
- (27) *saddha*. 211
- (28) 大正九・三〇上、正法華経は「雅願」、九八中
- (29) *saddha*. 218~219
- (30) 大正九・三〇上、正法華経は「本行願」、九八中
- (31) *saddha*. 219
- (32) 大正九・三〇下、正法華経は「立願」、一〇〇中
- (33) *saddha*. 224~225
- (34) 大正九・三〇下、正法華経は「所願」、一〇〇下
- (35) *saddha*. 226
- (36) 大正九・三一中
- (37) *saddha*. 231
- (38) 大正九・一〇一中
- (39) 同 三〇中、「是人<sub>二</sub>与<sub>二</sub>如来共宿。」一〇一中、「在<sub>二</sub>如来室等頓<sub>二</sub>一处。」*saddha*. 231 『*taṇhāgata-vihārāka-sāhāna-nivāsinaṣ*』(如来の精舎で一緒に住住する)
- (40) 大正九・三二下、正法華経は「本行<sub>二</sub>道時而自免<sub>二</sub>願」、一〇二下
- (41) *saddha*. 240
- (42) 同 240~241
- (43) 大正九・三二下、正法華経は「本亦自替」、一〇三上
- (44) *saddha*. 242
- (45) 大正九・三三下、正法華経は「於<sub>二</sub>往故世<sub>二</sub>自興<sub>二</sub>此替」、一〇四中
- (46) *saddha*. 251
- (47) 大正九・三七中、正法華経は「前世所行平等之願」、一〇六下
- (48) *saddha*. 271

「本下願を立ツ」考(望月)

「本卜願を立ツ」考（望月）

- (49) 大正九・二七中、正法華経は「我等行跡志性之所帰趣」九四下
- (50) *saddha*. 199
- (51) 大正九・三四上
- (52) *saddha*. 252
- (53) 大正九・三四上
- (54) *saddha*. 253
- (55) 註の(32)〜(35)参照、大正九・三〇中、下、*saddha*. 224~225, 226
- (56) 大正九・三六上
- (57) 同 三七上
- (58) *saddha*. 267
- (59) *saddha*. 275
- (60) 大正九・四〇上
- (61) *saddha*. 298
- (62) 大正九・四一中
- (63) *saddha*. 310
- (64) 拙論「見定淨品における *antariksa* と從地涌出品における *akasa* について」(『日本仏教学会年報』二十三)